# 底が突き抜けた」時代の歩き方 512

## 物事の本質を鋭く突くソンタグのラディカルさが忌避される理由

　スーザン・ソンタグは９・１１直後の文章でアメリカの各界から一斉に批判を浴びた、と言われている。それは、『ニューヨーカー』誌（０１年９月２４日号）に掲載された文章である。彼女は冒頭に、こう書いている。

《先日の火曜日の途方もない現実体験と、さまざまな公人やＴＶのコメンテーターが振りまいている独善的な妄言、あからさまな欺瞞。その乖離は驚くべきもので、気が滅入ってくる。あの事態を受けて堰を切ったように表明されてきた発言の数々はこぞって、民衆を子供扱いしているとしか思えない。これは「文明」や「自由」や「人類」や「自由世界」に対する「臆病な」攻撃ではなく、世界の超大国を自称するアメリカがとってきた、もろもろの具体的な同盟関係や行動に起因する攻撃に他ならない。だがその認識はどこにいってしまったのか。いまだに続いているアメリカによるイラクへの爆撃を自覚しているアメリカ人は何人いるだろう。》

　この文章が９月１７日発売の『ニューヨーカー』誌に掲載されたときのアメリカ人の反応は、凄まじかっただろうと推測される。なにしろ、９・１１直後のアメリカが、ブッシュの支持率が確か８０％を超えるほどの、報復に燃える異様な雰囲気に包まれていたことを想起すると、９・１１テロに関するアメリカ国内に流れたすべての言説を、《独善的な妄言、あからさまな欺瞞》と切って捨てる彼女の容赦ない筆鋒が、テロは世界の超大国アメリカが招来させた自業自得と、アメリカ国民（中にはそうでない人々もいただろう）以外の世界中のほとんどの人々が率直にそう感じていたことを言葉で言いあらわしたのだから、一斉に批判を浴びたどころではなかったにちがいない。おそらく集中砲火に等しかっただろう。幸い、その文章は９・１１の二日後にベルリンで書かれ、発表時はヨーロッパに滞在していたから、彼女に危害が加えられることはなかった。アメリカから遠く離れていたために、アメリカでの異様な熱気が手に取るようにみえただろうし、その異様さを恐れることなく書けたのだろう。もちろん、ニューヨークにいても、彼女なら同じように書いたと想像されるが、彼女は続いてこう書いて、アメリカ人の彼女に対する怒りや憎悪を決定的なものにしたことも推測される。

《また、「臆病な」という言葉を使うなら、他者を殺すためにみずからすすんで死んでゆく者たちに対してではなく、報復の恐れのない距離、高度の上空から殺戮を行なう者たちに対して使うほうが適切ではないだろうか。勇気（これを、道義的に言って中立の価値としてみた場合）を云々するならば、火曜日の殺戮の実行者たちを何と呼ぼうとも、彼らは少なくとも臆病者ではなかった。》

アメリカの指導者たちの振舞いに対しても、もちろん、ソンタグは手加減はしない。《ブッシュら公人たちの全員一致でご満悦、自画自賛とも言うべき、ソヴィエトの党大会まがいの楽天的な決まり文句を見聞きするにつけ、情けなくなる。アメリカの役人たちやメディア、コメンテーターたちがこの間まくし立ててきた、殊勝ぶった、そのじつ、現実を隠蔽するもの言いは、あえて言うなら、成熟した民主国家の名にもとる。》

８２年２月にポーランドの連帯運動を支援するためにニューヨークで開かれた集会の席で、「共産主義というのは、ひとの仮面をかぶったファシズムだ」と彼女が発言して物議をかもし、激しい非難の集中砲火を浴びたというエピソードに触れて言えば、彼女はソ連邦が崩壊した現在、いまやアメリカが「ひとの仮面をかぶったファシズムだ」と書いて、激しい非難の集中砲火を浴びているようなものである。

《何をおいても、ともに悲しむ、それは私もやぶさかではない。だが、手に手をとって、全員一緒に愚者になることはない。》（傍点は引用者）どうして《ともに悲しむ》のに、ともにバカにならなければならないのか。時間が充分経過すれば、アメリカの人々に内省的に受けとめられるにちがいないこの指摘も、ソンタグの火に油を注ぐ一連の言葉に、更に油を注ぐ結果をもたらしたであろうことは想像するまでもない。彼女はパリに滞在しながら、『ニューヨーカー』誌に掲載された自分の文章が、アメリカ国内でどんな目に遭っているかを知ったとき、怯(ひる)むことなく「アメリカで９・１１テロが起こったこと」の意味、そのことへの対処の仕方について、改めて書かないわけにはいかなかった。その文章の掲載は『ニューヨーカー』誌ではなく、また他のアメリカメディアでもなく、ドイツの『Lettre　International』（１０月４日発売）であった。９・１１の一週間後に書かれた文章の冒頭で、いつものようにアメリカの本質の一つに鋭く切り込んでいる。

《９月１１日の恐ろしい殺戮に対するアメリカや外国での反応を見ると、「アメリカ例外論」という教条が重要な役割をおびていることがわかる。ここではそれを教条と呼んだが、それはまた、アメリカ合衆国に住む、あるいはアメリカに移住しようと望む、ほぼあらゆる人が抱く特有の信念の一つである。よその地なら普通に、また共通して起こることでも、アメリカで起こったなら、これまでもこれからも、それは例外的な事態である、という頑強な信念がある。アメリカ人が信じているのは、たんにアメリカはもっとも優れた、自由な、豊かな、強力な国だというにとどまらない。アメリカはよそとは違う、アメリカは幸運に恵まれている、と信じているのだ。他の諸国なら抗しえない一連の試練や災忌からも、アメリカは守られている、と。

ほぼ二世紀間にもわたって、アメリカが移民たちの最大の目的地となってきたのはなぜだろう。アメリカでは、昔の歴史が繰り返されることはない、と信じられているからだ。アメリカは、歴史や政治の通常のあらゆる規則から例外となっている、というのが基本的な観念としてあり、それは啓蒙主義のイデオロギーに由来する。アメリカは現に新世界なのだ、との。》

「アメリカ例外論」とはアメリカ特別論でもあり、最近ではヨーロッパから、アメリカ

特殊論とみなされつつあることにもかかわっている。「アメリカ例外論」はいうまでもなく、他の「普通の国」から抜きん出た特別な国アメリカであって、この教条は、特別な国アメリカの周縁に他の「普通の国」が配置されていることにおいて、世界は成り立っているという構図を容易に浮かび上がらせている。ちょうど太陽系の中心に位置する恒星である太陽がアメリカなら、太陽の周囲を回っている地球等の惑星がアメリカ以外の「普通の国」とみなされることになる。アメリカが太陽に相当するなら、惑星である他の「普通の国」が地動説を弁(わきま)えているのに、アメリカだけは天動説を信じ込むのも道理だろう。《アメリカ人が信じているのは、たんにアメリカはもっとも優れた、自由な、豊かな、強力な国だというにとどまらない。アメリカはよそとは違う、アメリカは幸運に恵まれている、と信じている》ということは、アメリカは単に強力な「普通の国」ではなくて、天動説の国であることにおいて強大であるということなのだ。
「アメリカ例外論」とはしたがって、アメリカという国だけが天動説が公式に支配している「普通の国」であると考えることができる。だから、９・１１は天動説のアメリカにとって世界が引っくり返ったかのような、とんでもない大事件であったのだ。
《ここでは、そんなことは起こりえない、とアメリカの信条が頭をもたげてくる。だが、いまやそんなことが「ここで」起こってしまった。となると、アメリカが依然として例外であるとすれば、どのような意味合いでだろうか。「アメリカは二度と元には戻らない」という決まり文句 ── それはあっという間に「世界は二度と元には戻らない」へと変わる ── には、免疫が破壊されたという気持ちが反映されている。アメリカ例外論の教条と、アメリカが力をもつ必然と正しさへの信念とが、一対の観念をなしている。アメリカでテロ攻撃があったとなれば、アメリカ人はいやおうなく国の弱さを感じとる。だが、現実のアメリカの力は他のどんな国よりも大きく、このような心情は、ドイツ人やその他のヨーロッパ人には理解しがたいのではないか。》
　比類ない強者であるのに、自らを弱者と思い込みたがるアメリカ人、つまり、宮台真司の言う、「すでに力を獲得せし者が、弱者たる過去の記憶にしたがって美的に自らを鼓舞する国粋の営み」の恐ろしさ、要するに、充分強者であるのに、弱者たる記憶にしたがって振舞うことの恐ろしさ、については、なぜそういうふうに考えてしまうのかが理解できなかったが、「普通の国」の強大さとしてのアメリカではなく、唯一天動説が支配するアメリカとしてみるなら、腑に落ちるところがある。アメリカが「太陽」なら、太陽抜きに太陽系は成り立たないという意味で、アメリカ抜きに世界は成り立たない。したがって、「アメリカは二度と元には戻らない」ということは、必然的に「世界は二度と元には戻らない」ということになる。アメリカは「世界」に等しいからだ。
　９・１１はアメリカにとって、《そんなことは起こりえない》筈の事態であった。それは単に、アメリカではこれまで起こったことのない事態であるという意味のレベルを超えていた。《そんなことは起こりえない》アメリカとは、そんなことは起こってはならないアメリカであり、そんなことは起こる筈もないアメリカのことであった。地動説

に支配されている国の住民が唯一天動説が支配しているアメリカを攻撃するなどとは、想像できない大変事であった。「普通の国」ではありえなかった筈なのに、「普通の国」のように攻撃されたのだから、アメリカ人には大ショックであった。不釣り合いなほどに大きかった自信の喪失もまた、不釣り合いなほどに大きかった。《免疫が破壊されたという気持ち》の落胆は、他の「普通の国」との比較においてけっして慰められることはなく、あくまでも権威失墜前の高く聳えるアメリカとの比較からもたらされた。要するに、アメリカ以外の他の「普通の国」など、アメリカにはもとから眼中になかったということだ。

数週間後にニューヨークに戻ったソンタグは、いくつかの質問状に対する回答を寄せているが、それはアメリカのマスコミではなく、イタリアの新聞『I1　Manifesto』の１０月６日号に掲載された。『ニューヨーカー』誌への彼女の文章の掲載が集中砲火を浴びて以降、アメリカのマスコミがソンタグを避けていたのが見て取れる。このインタビューで彼女が次のように答えているところから、９・１１に対する彼女の姿勢や見方が垣間見られる。

《亡くなった何千という人々》の《なかには、オフィスで働いていた人々が下りてくるところを、われ先にと階段を駆け上がっていった三百名以上の消防士たちもいました。死者のなかには、ビル内にあった金融会社で働く、やる気満々の高給取りばかりではなく、やはり同じビルで清掃、事務の手伝い、調理などの仕事に従事する労働者も多数含まれていました。そのうち７０人以上は、ほとんどが黒人かヒスパニック系でしたが、片方のタワーの最上階にあった「Windows　of　the　World（世界の壁）」というレストランの従業員でした。あまりにも多くの物語、あまりにも大量の涙。悼む心を忘れることは野蛮なことです。他の残酷な死、［ボスニアの］スレブレニツァからルワンダにいたる地域で失われた生命と、これらの死とは、どこか違うという考え方もまた野蛮です。》

「残酷な死」によって一人ひとり異なる人生の物語が無惨にも断たれ、《あまりにも大量の涙》が流されていくことに政治的な優劣や人種を持ち込むべきではないし、９・１１による死者にメディアの脚光が当てられているからといって、ほとんどメディアに取り上げられない《［ボスニアの］スレブレニツァからルワンダにいたる地域で失われた生命》とは、《どこか違うという考え方もまた野蛮で》あるという見方は当然、《アメリカや同盟諸国の全面「戦争」という対応で苦しむのは、あのテロリストたちではなく、より無辜（むこ）の存在、今回の場合で言えば、アフガニスタン、イラク、その他の地の民間人》へと視線を向けさせていく。なにが最大の問題なのか。テロリストたちであれ、ブッシュやブレアらの政権リーダーたちであれ、彼らの手による人間の破壊が、死者を生き返らせることのない単なる野蛮な破壊にすぎないところに、問題が最大に集中している。彼らは誰一人として、自分たちが破壊した人間たちを元通りにする力を持たないまま、残酷な殺戮を押し進めているのだ。

この「残酷な死」をこれ以上拡大させてはならないという考えを、ソンタグは表明す

る。９・１１は《「文明」や「自由」や「人類」や「自由世界」に対する「臆病な」攻撃ではなく、世界の超大国を自称するアメリカがとってきた、もろもろの具体的な同盟関係や行動に起因する攻撃に他ならない》と、彼女が当初述べていた正当な考えを主張することをやめて、《この恐怖の事態をもたらしたのはアメリカ自身だ、アメリカの領土内で起こった何千人の死の責任は一部アメリカにある》という、多くの知識人の見方には与しないとはっきりと表明する。《たしかに、外国でのアメリカの行動には責められるべきものが多々ありましたが、それでも、アメリカこそ元凶であるとの主張のもとに、いかなるかたちであれ、この惨事を切り抜ける、あるいは看過することは、道義的に言って卑劣です。テロリズムは無実の人々に対する殺害です。しかも今回のケースは、大量殺人だったのです》というとき、このような「大量殺人」を二度と起こさせないためには、《アメリカこそ元凶であるとの主張》によって、バランスを取ったり、９・１１実行犯たちに対する同情で彼らの犯罪と相殺するようなことはしてはならないと言明しているのだ。

ソンタグはまた、９・１１以降のアメリカの社会状況についても述べている。

《いま現在、アメリカには強烈な順応主義がはびこっています。９月１１日の攻撃の成功に、人々は驚愕し、衝撃を受け、怯えています。最初の反応は結束すること（列を引き締める［close　ranks］という軍隊用語を想起させる）、そして愛国心の再認。あたかも、あの攻撃により、愛国心に自信がもてなくなったかのように。国じゅうが国旗に覆われています。アパートや家の窓から国旗が垂れ、店やレストランの表に国旗が掲げられ、クレーンやトラックにも、カーラジオのアンテナにも国旗がたなびいています。アメリカの伝統的な暇つぶしだった大統領（それが誰であれ）の揶揄も、愛国心にもとると決めつけられるようになりました。何人かのジャーナリストが新聞や雑誌から解雇され、ごく穏やかな批判的見解（攻撃当日のブッシュの謎の失踪に疑問を投げかける、など）を授業で述べただけで、公に譴責（けんせき）を受けた大学教師もいました。検閲のなかでももっとも重大にして効果のある自己検閲がそこここで行なわれています。討論を展開すれば意見の相違と同一視され、さらに意見の相違は忠誠心がないものと決めつけられます。この新たな、先の見えない緊急事態では、従来のさまざまな自由の保障は「贅沢」かもしれない、という思いが広がっています。世論調査によると、ブッシュの「人気度」は９０パーセントを超えそうですが、旧ソ連型の独裁体制の指導者たちの支持率にほぼ近い数字です。》

続けて、《注目すべきは、外交政策にまつわるほぼあらゆる問題に関して、人々がきわめて従順なことです。この受け身の姿勢は、リベラルな資本主義と消費社会の勝利の当然の結果かもしれません》と皮肉り、民主党と共和党にほとんど違いがなくなってきたことについて、《アメリカのインテリゲンチアのほとんどが非政治化されたことは、順応主義を、また政治生活一般の一元化 ── 「いわゆる me-tooism［みんなで渡れば怖くないといった傾向］」をまさに反映しているのです》と指摘しているが、彼女自身につ

いて、《私のような異なる意見を述べる知識人 ── 残念ながら少数にすぎない ── に対する懲罰の熱狂的な波がいくつか起こっています》と語っているところから、９・１１直後のソンタグのアメリカ国内での居心地のよくないポジションが、想像通りに窺われる。

そんなソンタグが昨年の暮れに死去したとき、アメリカ国内のマスコミや知識人の間では沈黙に近かったと感じられたが、日本でもソンタグの死に対する追悼文は多くはなかった。この数年の間に他界したジャック・デリダやエドワード・サイードと比較しても、少なかったように見受けられた。たとえば、朝日新聞紙上でかつてソンタグやサイードと往復書簡を交わしたことのある大江健三郎は、サイードに対する追悼文を書き、その後の文章の中でも折に触れてサイードに言及するのに較べ、ソンタグに対しては追悼文もなく（私は見たことがない）、ソンタグへの言及も知らない。相性というものがあるのかもしれないが、おそらくそれ以上に、大江氏にはソンタグの言動にある「わからなさ」が伏在していたためであろうと察せられる。いいかえると、ソンタグには大江氏の理解を超えるところが明らかに認められた。それは大江氏だけではなく、他の文筆者たちにも感じられたにちがいないソンタグの「理解しがたさ」であっただろうと憶測される。

最初のソンタグ宛の手紙（９９．４．２５付朝日）の中で、大江氏は次のようなエピソードを取り上げている。

《私がノーベル賞を受けた直後、アトランタで先行する受賞者たちとの会議がありました。帰り道のニューヨークで友人が催してくれたパーティーに、エドワード・サイードとともに、あなたが来てくださいました。どうしてあのように無意味な会議に出たのか？

とあなたは問いかけられました。私はお答えしました。

パスはメキシコの、ショインカはナイジェリアの、ウォルコットはカリブ海の、モリソンはアメリカ黒人の、そしてブロッキーは崩壊したソヴィエトの、みなそれぞれの２０世紀の傷痕を魂にきざんで生き、かつ普遍的に表現している。自分は超国家主義の日本で少年時を、戦後民主主義の輝きと幻滅のなかで青年期以後を生きたモデルとして、そこに参加したいと思った……》

この返答に対してソンタグは９９．６．３付で、次のように説明している。そのような「僭越な問いかけ」については全く記憶になく、自分も知り合いである《これらの作家たちとお会いになる機会が「無意味」とは思いもしないことで》、彼らも《あなたと同じように、私たちの世紀の歴史の戒めと激しい苦痛に満ちた消息の証人です》と述べて、続ける。

《はっきり言えることは、あの会議（そう呼ぶべきものだとしたら）が私にとって「無意味」に思えた原因は、出席者の顔ぶれではなく主催者の問題です。お会いする直前にあなたが出席なさった二日間のイヴェントは「文化オリンピック」と呼ばれていて、オリンピック史上のもっとも商業化された金儲け偏重の大会、第２６回オリンピック大会のための大がかりなウオーミングアップ、ＰＲ事業の一環でした。偉大な作家たちが大

会のプロモーションのために（激しすぎる言葉かもしれませんが）搾取されている、と私は思いました。

アトランタは文化的な豊かさで知られる都市ではありません。いずれにしてもオリンピック委員会は、バルセロナで開催された第２５回大会のような豊かな文化的環境に匹敵するものを提供しよう、などという意欲はもちあわせていませんでした。しかし誰かが、ノーベル文学賞受賞者をアトランタに招集して短期の顔見せをやったらどうか、と思いついたのでしょう。委員会にすればあなた方はスーパースターです。まもなくアトランタにやって来て勇猛果敢ぶりを発揮し、スポーツ界のノーベル賞とも言えるメダルを目指して競い合うスポーツ界のスーパースターたちと同じように。

あなたはなぜ自分たちがアトランタに招かれるのか、理由を考えることすらなかったはずです。大江健三郎は喜んで招待を受け、ブロツキーやパスたちと話し合う機会をもつ。どこも悪いことはありません！　それでも事実は変わらず、あなた方は真剣な文学の意気軒昂な目的を前進させるためではなく、オリンピック大会の宣伝に利用されていたのです。

お会いしたニューヨークでのディナーの席で私の問いかけの背後にあったのは、このような思いだったはずです。私は古典的な西洋流の考え方をして、「不純な」前後関係をいまいましく思っていました。超商業的なオリンピック大会と文学とは、どんな関係があるのだろうと。

あなたが私の問いかけを意味不明と思われたのも納得できます。

私もそう思います。あらゆる社会的状況は、アトランタでのノーベル賞受賞者の会合も含めてでしょう、いやおうなく「不純」であるということを私は意識していますし、あのときもその意識はあったと思います。

そこで自問するわけです。自分に議論を吹っかけるのが好きなものですから。不純で何がそんなに悪いのか？　日本は何度も訪問しており（７９年以来）、しばしば気がついたことですが、「位階性」と「格づけ」というすぐれて西洋的な考え方を、日本人は空間のしつらえ方において何と見事に回避していることか。オフィスビルの１０階に能楽堂がある、デパートの屋上にお社がのっかっている、日本の最強企業の一つの名を冠したビルの地下でエレベーターのドアが開くと、パリでもっとも有名なレストランのぎらぎらしたまがいものが現われる。

あなたとブロッキー、パス、その他の顔ぶれがアトランタで一緒にいる。このことを前述のような意味でどこか日本的な現象として考えてみました。何かというと憤りを感じるのは楽しいことではありませんけれど。偉大な作家ともなると起こりがちなことですが、作家が何かを代表する人物となった場合は、「利用される」ことになります。比較的害の少ないこともあるでしょうが、それでも商業主義は気になります。あなたもそうでしょう。私たちの意図さえ純粋なら、いかがわしいスポンサーでも共謀者にならないですむはずだ。そう信じられたらと願うのですが、そうはいきません。》

誰に対しても容赦なく、友人（？）である誠実な作家の大江健三郎に対してさえ、このような辛辣な苦言を呈さざるをえないソンタグだが、《あなたのお手紙にある多くの問いかけにお答えしていないことに気づき、気まずい思いもあります》と、配慮もみせている。大江氏のノーベル賞受賞講演での「あいまいな日本のなかの私」という表題に寄せていえば、「あいまい」なのは日本だけではなく、あなた自身もではないのか、と鋭く詰め寄っているかのようなソンタグのこの忠告に対して、では大江氏はどのように向き合っているのかといえば、６．２５付朝日で《私は、反対者としての精神によって文学を作る、というあなたの態度にも異論がありません》と述べ、こう受けとめる。
《ブレイクは若者たちに「軍営、法廷そして大学」のなかの「雇われ人」に対して反対せよ、と呼びかけました。いま「雇われ人」は、マスコミはじめ文化構造の全域をみたしています。私の受賞直後の、軽率な振る舞いにあなたが注意してくださったのは正しかったと思います。》

さすがに無視してはいないが、大江氏にはやはり彼の理解を超える問題だったにちがいない。文学もまた、大学や自分の書斎で担っていることが信じられた牧歌的な時代ではなくなってしまった。文学は自分の外へどんどん出かけなくては、自分を保っていられない時代になった。先の書簡のなかでソンタグのいう、《理想的には作家、真剣な作家のやることは精神的な死の状態と戦うことです。共同体の気楽な生活にたてつきながら毎日みずからの魂と、自己と自分の母語との関係を蘇生させること》を引き受けなくては、作家であることを持続することはできなくなった。ソンタグは７．１１付朝日で、《いまの堕落した文化のあらゆるものは、現実を単純化するよう、叡智を嫌悪するよう、私たちを手招きしています。私は作家に、その一人として自分自身にも、ものごとについての複雑な見方を明晰に言葉で述べることを期待しています》と返信しているが、彼女のラディカリズムは大江氏の視野が届かない、というより、そもそも彼の発想にはない場所を掻い潜っていたとみるほかない。

加藤典洋の『僕が批評家になったわけ』のなかで、内田樹が短文「古だぬきは戦争について語らない」で、《１９９９年のＮＡＴＯによるユーゴ空爆をめぐるスーザン・ソンタグの言行態度にふれ》ている個所を取り上げて、次のように言及しているのをみると、彼女に対する異和や反撥の水準がよくみえてくる。
《戦場に来ないで戦争についてあれこれ論評する知識人に「怒りを禁じ得ない」ソンタグの感覚は、戦場に来ないであれこれ論評するだけの日本政府の弱腰に「怒りを禁じ得ない」でいた（湾岸戦争の時の）アメリカ政府の感覚と同型的である。

そして、自分がアメリカ政府と「立場」が違うだけで、同じ思考の文法で語っていることにスーザン・ソンタグ自身はどうやら気づいていない。

私たちは知性を計量するとき、その人の「真剣さ」や「情報量」や「現場経験」などというものを勘定には入れない。そうではなくて、その人が自分の知っていることをどれくらい疑っているか、自分が見たものをどれくらい信じていないか、自分の善意に紛

れ込んでいる欲望をどれくらい意識化できるか、を基準にして判断する。
　その基準に照らした場合、スーザン・ソンタグの知性はかなり低いと断じてかまわないだろう。しかし、これはソンタグ一人の責任ではない。》
　以上の内田樹の文章を取り出して、加藤氏は《内田は、ユーゴ空爆についてどう思うか、と尋ねられ、「わからない」と答えることには権利があり、またその「わからない」という答えには、「わかる」つまりイエスであったりノーであったりすることに、少なくとも勝るとも劣らない、思考の果実がある、と述べている。考えてみれば当然のことだ。しかし、このことが、このような現代の批評のことばとして語られたことは、これまでにはなかった。たぶんこのことばは、いま「おじさん」である人の日本での「若かりしころ」の経験をくぐり抜けて、「アメリカの知性」であり「アメリカの良心」である、スーザン・ソンタグの前に置かれている》と言う。
　更に、《私は戦争について語りたくないし、なんらかの「立場」もとりたくない。もちろん現場になんか頼まれたって行きたくないし、「戦闘にくみする」ことなんかまっぴらごめんである。／そんな人間は戦争について論じる資格がない、とソンタグとその同類たちが言うから、私は黙っているのである。黙るもなにも、そもそも私には何も言うことがない。戦争のことは、私には「よく分からない」からだ》との内田樹の文章を引用して、《いわれていることはまったく逆だが、この内田のことばは先の小林秀雄の「戦争について」のことばと似ている。逆ではないか。どこが同じなのか、といわれるかも知れないが、その戦争に対する態度が、同じなのである。そこには、新しいできごとに対する、自分の考えから出た、世に行われているのとは違う、新しい態度の表明がある》と評する。
　加藤氏がこのような個所を引用して内田樹を評価するのは、もちろん、ソンタグに対する異和感を彼がよく表明してくれたという思いがあるからだろう。内田樹が《ソンタグとその同類たち》というからには、加藤氏も内田樹と同類ということになる。ソンタグは彼女自身に対する異和や反撥が渦巻いているのを充分察知していた。それらの異和が批判として彼女自身に届く内容を持ちえていないこともわかっていたから、彼女には一向に臆するところがなかった。内田樹のソンタグ理解をみるかぎり、かれの《知性はかなり低いと断じてかまわない》。しかし、これは彼《一人の責任ではない》。彼がみているソンタグのなかにソンタグはいないのだから、彼はユーゴ空爆への言及以前にソンタグについて「わからない」と、自分の知性をもって率直に言えばよかったのだが、「わからない」こともわからなかったのだ。内田樹の文章もひどい水準だが、それを引用して評価する加藤氏も大学教師ボケとしているとしかいいようがないひどさである。
　彼らが大学教師をしている自分たちを批評のテーマとして取り上げているのを一度もみたことはないが、自身の追い詰め方ひとつを取っても彼らがソンタグに遠く及ばないのははっきりしている。『僕が批評家になったわけ』には、もう一個所、ソンタグが出てくる。《価値基準として「面白い」をいうときには、その行動や芸術がどんな結果を

もたらすかなどということは考えていない。真理などそこではお払い箱である。この「面白い」で消費主義はどんどん領域拡大する。「面白いものが増えれば増えるほど、市場の成長が進む」。「ごちゃ混ぜ性、そして、理由などなくとも「面白ければ」なんでもよい、という肯定」。彼女はこれを否定する》という文章のなかでの「彼女」はソンタグである。

「美についての議論」のなかで、《美の考え方が頓挫するようになって》《明らかになってきたのは、「美しい（ビューティフル）」に対する「面白い（インタレスティング）」の勝利である。誰もがいまでは、何かを褒める場合、「美しい Beautiful」の代わりに、「面白い Interesting」という。》美しい夕日の写真を見て、誰でも《この夕日、美しいじゃない、ではなく》、「そう、この写真、面白いじゃない！」という表現を選ぶのに、「あの夕日、面白くない？」などと言うことがあるのだろうか、ということだ。そんなソンタグに対して加藤典洋は、《「美しい」の名のもとに「面白い」を断罪しては、いけないのではない》かと、《ここでのソンタグは、自由主義者として、硬直化し、視野狭窄に陥っている》と批判する。ソンタグがなにを言おうとしているのか、に耳を塞いで、一見物分かりのよさを示してみせるのは、先の内田樹と同じである。加藤氏の硬直性、視野狭窄性は、次のような思い出を持ちだしてくるところにも見て取れる。

《筆者が学生で、大学が相当に荒れていたころ ── 全共闘運動が盛んなころ ── 大学の象徴でもある講堂を占拠すべきか否かでこの無党派の寄り合い所帯の学生たちのあいだで、討論が起こったことがある。侃々諤々、さまざまな意見が出て決まらなかったら、かたわらの窓のへりに寄りかかっていた一人が、「なに、面白いからだよ」とぽつりと一言いった。そしたら全員がそれに、おっ、それはいいな、と説得され、講堂の占拠に動いた。

いまから見ると、だから全共闘というのはダメなのだともいわれそうだが、そのときの気持は違っていた。そこでの「面白い」は、「美しい」とも「正しい」とも「気持がよい」ともちがわなかった。社会の変革、理不尽なことを是正したいという公共的な意欲と、面白く素敵なことをしていると気持がいい、といういわば私的な歓びが、圧力釜のなかで一つだったのである。》

全共闘運動にもかかわり、反戦街頭闘争を担ってきた私自身の経験からしても、なによりも「面白い」が肝心で、だいいち面白くなければ身体が動かなかった。闘争に祭りの「面白さ」は付きものだ。行動原理として「面白い」は不可欠であったが、その「面白い」がやがて引き寄せずにはいなくなる事態が、「面白い」では済まされないこともわかっていた。つまり、そこでの「面白い」は暗澹にほかならなかった。

言葉としては同じ「面白い」であっても、ソンタグが６０年代末の学生運動を覆っていた祭りのような「面白い」を、「面白いものが増えれば増えるほど、市場の成長が進む」に結びつけて、否定しているとはとても思われない。戦時下のサラエヴォで『ゴドーを待ちながら』を現地の俳優たちと蝋燭を立てて稽古し、上演することはソンタグに

とっても「面白い」体験にちがいなかった。「面白い」の感覚が根底になければ、なにごとも続かないことを、誰よりもソンタグは知り抜いていた筈である。

ソンタグのこの文章に目を通してはいないが、彼女の他の文章から推測する限り、思考停止状態としての「面白い」に対して彼女は批判していると考えられる。「面白い」が我々に属しているのではなく、我々から切り離された消費主義に乗せられていく「面白い」ということではなかったか。「面白いものが増えれば増えるほど、市場の成長が進む」というときの「面白い」とは、本当に「面白い」かどうかもわからなくなっている状態であるが故に、本当は「面白くない」が裏面にくっついているような「面白い」ではなかったか。おそらくソンタグは「面白い」を批判しているのではなく、「面白い」という言葉で押し出されている消費社会のなかでの我々の無内容性、空洞化、無葛藤性といったことを批判していたのではなかったか。今回の９・１１郵政選挙は「面白い」にはちがいなかったが、その「面白さ」は、《いまの堕落した文化のあらゆるものは、現実を単純化するよう、叡智を嫌悪するよう、私たちを手招きしています》（ソンタグ）というものではなかったか。

全共闘運動の「面白い」には、主体の重さが伸し掛かっていたが故に、責任が伴っていた。しかし、消費社会で蔓延している「面白い」には主体自身が消費され尽くしてしまっているが故に、そこに伸し掛かるものはなにもなく、したがって主体の責任など皆無であった。《この、ちゃらんぽらんで、どこにいくのかわからず、「真理」のことを顧慮せず、俗人の目をひくだけの「面白い」こそ、誰にも開かれたスタート地点である》と加藤が言うとき、彼は明らかに全共闘時代の「面白い」を根底に据えている。その「面白い」が言葉としては同じだけで、根本的に異なってきているとは考えていない。だから、「面白い」を《誰にも開かれたスタート地点》とみなす。どのようにして《誰にも開かれたスタート地点》となりうるのかについては、真剣に考えられることがない。《スタート地点》になりうるなら、「面白い」を否定することがよくないことはわかりきっているのではないか。

私にとって非常に興味深いのは、内田樹であれ加藤氏であれ（たぶん大江氏も）、彼らに代表される知識人たちにソンタグが受け入れられるなかで批判されずに、頭から反撥されて忌避されている（ようにみえる）ことである。もちろん、このことは、彼ら知識人たちの根底的な盲点であって、ソンタグの盲点ではない。《身をもって目撃すること、参加すること》、そして「書く」ことを貫いたソンタグは、彼ら知識人たちの足下に大きく拡がっている暗渠をたえず凝視していたために、そのことに不安を覚えている彼らは「わからない」振りを装って、ソンタグを頭から抹殺したい衝動に駆られているのではないだろうか。

２００５年１１月１６日記